繊維産業と大学教育

Textile Industries and College Education

平 井 利 博

寄稿を依頼されたとき、最初に浮かんだのがこのタイトルだった。前後を考えずに、このタイトルを事務局に送ってしまった。実際に筆をとってみて、繊維産業の実情に疎いことを思い知らされて困惑しています。しかし、以下では、誤解を恐れずに筆を進めます。

日常的な生活の中で、繊維産業の先端化と多様化を自覚しないで済むことは、多様化が産業イメージを希薄にし、生活にすっかり溶け込んでいるためであると思います。技術面で言うなら、最先端技術を駆使する高級衣料品をごく当たり前のように手にしている我々は、生活のしょうしゃ化の中に埋没してしまっているために、その恩恵を自覚できないようです。一方で、昨今の、衣料品のすさまじい低価格化の波は飽食感を強めるだけでなく、その背後で進む国内の技術的荒廃と喪失に対する危機感を麻痺させています。

最近の国家産業戦略に繊維産業が組み込まれていますが、想像以上の惨状を呈しているような気がします。快適な物質生活の根幹は生産技術に依存しており、労働コストの低減を求めて流離することには自ずと限界があります。そして、しかるべきときが来た時、我が国の繊維産業が技術的な継承を失ったために再起不能であれば、国家の衰勢に影響することは明らかです。なぜなら、この産業を支える精緻な機械技術、加工技術、化学技術、制御技術など、いずれも、その発展と多様化が現在のIT産業の基盤技術を形成しており、基本的なものだからです。したがって、これらの技術は産業形態の変遷の中でもきちんと、科学として、保持されている必要があります。

歴史的に見て、繊維産業の多様化は衣料としての繊維の必然です。裸の猿から衣をまとう人へ飛躍し、さらに、快適な生活環境を求め続けて今日があります。衣の技術は皮膚の機能を補完し、医の領域にまで踏み込んでいます。こうした流れの中で、苦者に心をときめかす繊維技術を訴え、その広がりの意味を説こうとすることは、その様態のあま

りの変化が、彼らの理解を超え、単なるこじ付けにしか映りません。繊維産業の中で特に素材・機械関連分野は既に長年にわたって多様化を進めており、繊維の占める領域は低下の一途をたどって久しい。この傾向は、既に韓国、中国などでも顕在化しています。米国でもDuPont社が研究から繊維部門を切り離したことは周知のとおりです。しかし、米国ではノースカロライナ州立大学などが基幹的な役割を担って研究教育を継続しており、ヨーロッパでもきちんと教育研究システムを保持しています。いずれにしても、基盤技術としての繊維関連技術の保持、発展、止揚は大学の使命として重要です。先にも述べたとおり、科学としての繊維科学は生物、化学、物理の基礎学問に関連して極めて奥の深いものがあります。繊維産業が総合科学にその基盤を持つからです。

さて、素材関連領域(いわゆる川上)から離れ、繊維製品(川中から川下)に近づく状況は一層厳しい状況になっています。まさに、新たな産業戦略が必要とされている領域でしょう。その可能性を担う科学が感性工学に代表されるような新しい領域です。大学教育にこうした視点を取り込まれたのは最近です。従来、細分化された固有の学問領域を形成してきた多くの関連する分野を集約し統合しようとする動きが学会として形をなしたのは最近で、これからが本番です。すなわち、産業界や社会に、こうした試みの社会的な重要性が認知されるには、まだ、いくらかの時間が必要です。

他方、産業構造の変化とそれを取り巻く環境の変化の中でJABEE、大学評価機構などが動き始めています。繊維学会として繊維技術者教育に関する独自の領域を確立できていないことは残念ですが、国際的な技術者資格認定機構の設置に向けての取り組みは学会の役割としても重要となってきます。学会の役割に、専門的な教育分野への社会的な貢献(学問体系などの評価機能を持つこと)が新たに付加されます。技術者資格認定とそのための教育のあり方という視点から具体的な役割が生まれたことになります。

今秋9月下旬、信州・真田幸村ゆかりの地、上田市で開催される秋季研究発表会は、先進的な繊維教育研究に強くコミットすべき(私見)繊維学部への取り組みも感じていただける機会にしたいとも考えています。こうした交流の場は、思いを共有する本学会の発展と新たな展開に寄与するもので、繊維関連科学の21世紀への展望を示す場の一つになることを願って、多くの方々が奮ってご参加くださることを希望しています。

TOSHIHIRO HIRAI
信州大学繊維学部 教授 工学博士、平成13
年度繊維学会秋季研究発表会実行委員長
〒386-8567 上田市常田3-15-1
Tel: 0268-21-5405
e-mail: tohirai@giptc.shinshu-u.ac.jp
〈専門〉高分子化学
〈趣味〉パソコン、最近はインターネット